

テルツリアヌス「殉教者達に」

土 肥 昭 夫

テルツリアヌスが「殉教者達に(Ad martyres)」をしるしたのは一九七七年頃とされている。というのは六章の最後の記述が、かのルグトヌム(リヨン)に於て軍人皇帝セヴェルス(S. Severus)が當時のブリタニヤの勢力者アルピヌス(S. Alpinus)を破りその下にあつた高位高官の者達を無残に殺害したという事柄にふれているものと思われるからである。まことにこの時代はロマ帝國にとつて混亂と暗黒の時代であつた。政治的には所謂軍人皇帝時代で權力ある者が軍隊の支持の下に皇帝の地位を奪略し、經濟的にはロマの古代資本主義經濟が既に崩壊期に入つた時代であつた。

このような混亂が民心を焦躁に或は興奮にみちびきこれが(ロマの)神々を信ぜず人類を憎惡するものとみられた基督教徒の迫害に結びついたのである。テルツリアヌスの語を引けば「彼等は善良なる者を憎ませるように陰謀を企て、罪なき者の血に對して叫びをあげ、彼等の憎惡の辯解としてあらゆる國家の損害、民衆の不幸の原因に基督教徒があると決めるといふ根もない理由をあげるのである。若しティベル河が市の城壁位増水したら、若しナイル河が田地の中に水を施さなかつたら、若し天が雨が降らせなかつたら、若し地が震えたら、若し饑饉、疫病があつたら、直ちに基督教徒をライオン(Christianus ad lionem)とあつた」。(Apol. 40)又セヴェルスの皇帝就任の頃にしるされたというアレクサンドリヤのクレメンスの記述によれば「吾々には毎日無實の殉教者達が列をなして焚かれたり磔にされたり又斬首されたりするのがみられた」(Strom. 2)とある。もとよりこのような迫害は大規模な政治的組織を以てなされた

ものではないが、しかもかのプリニウスとトラヤヌス帝の間の往復書簡にみられた帝國の教會に對する態度はこの時代には次第に悪く硬化してゆく模様であつた (Apol. 2)。今ここに何かの事情で幾人かの基督教徒が捕われて獄中にながれている。彼等が一章の始めに於て未遂殉教者 (martyres designati) とされている事より既に死刑を宣告されてその日を待つ人々であつた事が知られる。

この書は彼の三十八にわたる著作の中最初のものであり又最も短いものであるが、彼自らの獨創的思想と修辭法が驅使され才氣渾發、ネアンデル (A. Neander) やハウク (A. Hauck) がテルツリアス理解のための最初の著作としてかかげている所以も了解される。全篇をつらぬく靈魂と肉體のきびしい對立や基督教道徳に對するきびしい反省的態度は後にモンタニズムに走つた彼のゆき方と合わせて考へてみる必要がある。更に大切なのは當時の基督教徒が異教の世界の中で如何なる生活をしなければならなかつたか、又この時代の狀況が如何なるものであつたかを知らせてくれる點であらう。

第一章

殉教者と定められた祝福された人達よ、私達にとつて女主人で母なる教會 (domina mater Ecclesia) がその財産より牢獄にさし入れる肉體の糧の中に、私達が靈魂の糧となるものも送つたから受取つていただきたい。というのは肉體が育てられても靈魂が飢えているならば無益であるから。もとより若し弱いものが顧られるとするならば、それより弱いものは猶更甚るにされてはならぬ。私は君達に獎めをなす程のものではない。けれどもきわめてすぐれた闘技師でもその教師や監督者のみならずただの素人からでも、彼等が遠くから激勵すると屢々そのような觀衆によつて有益な暗示を得るものである。

この故に祝福された人達よ、先ず聖なる御靈を憂えさせぬよう⁽¹⁾に、御靈は既に牢獄に入つて君達と共にいたまうのだ。若し入つて共になかつたとしたら君達は今日そこにはいなかつた筈だ。その故に御靈がそこに止まるように業を努めていただきたい。かくしてこそ御靈は君達をそこから主の方にみちびくのだ。成程牢獄は悪魔の住家で、その中にその一族が住んでいる。しかしその故にこそ君達は悪魔の住家を踏みつぶすために牢獄にやつて来た。そして既に君達はその戦に於てその襲撃に打勝つた。その故に悪魔をしてこんな事を云わしめぬように「彼達は私の所にいる。私は無益な憎悪、背反⁽²⁾、相互の不和を用いて彼等をさそい出さう」と――。悪魔を君達の面前から追放し、縮めて固いものにしてしまい深淵に隠さしめよ、あたかも魔法をかけられ退散させられた蛇のように。彼が君達に悪事を行わうとしてその國に首尾よく住ましめず、君達が一致して武裝し防禦しているのを知らしめよ。君達の平和は彼との鬭争にある。教會に於てこのような平和を持たないものがよく牢獄の中にある殉教者達にそれを慕い求めてくるものだ。この故に君達はそれにそなえて力ずよく他の者達に示すことが出来るように自分の中にそれを大切に保持しておかねばならぬ。

(1) エペソ四・三〇

(2) affectio, コリで迫害のときに於ける背教 (lapsus) がいましめられている。

第二章

おそらく君達の靈魂を煩はす他のいろいろの事がたえず牢獄の中にまで押寄せて来たことだろう、君達の両親も亦同様だろう。しかしそこでは君達はこの世自身から (ab ipso mundo) 離れている、ましてその世俗的な事からは (a saeculo rebusque ejus) 先ず離れてしまつている。この世から離れている事柄は君達を不安に陥らせない。若しむしろこの世自身が牢獄であるとみとめるならば、君達は牢獄に入つたというよりはむしろそこから出たものと思われる。この

テルツリアヌス「殉教者達に」

世では人間の心を全く闇にしてしまふような暗さが牢獄よりもある。この世では人間の魂そのものを奪うようなおそるべき束縛が牢獄よりもある。この世では邪惡な不潔つまり人間の情慾が吐き出されている。この世では牢獄よりも多くの事柄が、最も卑しむべき事柄に結びついている、したがつて全人類も亦當然そうである。結局總督 (proconsul) ではなく神の審きがのぞまれるわけである。この故に祝福された人達よ、君達は圖らずも「牢獄」から避難所へ移しかえられたと思われよ。そこには闇がある、しかし君達自身が光命だ。そこには束縛がある、しかし君達は神によつて解放されている。そこには厭な匂が吐き出されている、しかし君達は快い香だ。裁判官が氣になる、しかし君達はその裁判官を審くものになるだろう。この世の益に憧れる者がそこでは苦しむ。しかし牢獄の外に於て基督者はこの世を放棄したのであるから牢獄の中に於ても亦牢獄を放棄するのである。この世を外にして生きているものはこの世の中にあつても何ものにも溺れることはない。若し君達が生の快樂の或るものを捨てるとすれば、それはより大なるものを得ために或るものを捨てるといふ仕事をしているのだ。

この上私は神が殉教者に施したまう報いについて何も云うことはない。ただここでこの世にある生活と牢獄にある生活を比較し、果して牢獄に於て靈魂は肉體がそこで失うより以上のものを得ていないかどうかをみてみよう。否むしろ肉體さえも教會の配慮と兄弟達の施與によつてそれに正當なものを失つたのではない、その上に靈魂はつねに信仰の益となるような事柄を得ているのである。君は最早異教の神々をみることはないし、その畫像に跪くこともない。又恆年の國家の祝祭日に自ら混つてこれに關與することもなく、その卑俗な犧牲(犠牲)の惡臭に惱まされることもなく、演技場の馬鹿騒ぎや、祝賀會參列者達の亂暴狼籍や淫亂さに參つてしまふこともない。君の眼が、公設の遊廓に引きつけられる事はない。躓き、誘惑、邪惡な想念、そして既に迫害からも自由である。荒野が預言者のためにあつたように丁度牢獄が基督者のために備えられている。主御自身もより自由に祈りこの世から退くために屢々寂しい所に留りたまうた。更に自

らの榮光を弟子達に顯わしたまうたのも人里離れた所に於てであつた。⁽⁴⁾ 私達は牢獄という名をとりかけて寂しい所と云わう。身體は閉され肉體もしばられてはいるが、靈魂には全てが開かれている。靈魂によつて歩み、靈魂によつて進め、君の前にある暗い場所長い廊下を進むのではなく神へとみちびく途を進め。君達が靈魂によつてそこを歩めばその度毎に君達は牢獄の中にいないことになる。靈魂が天國にあるとき、獄吏は鎖の中に何もみとめ得ない。靈魂はすべての人間をたずさえて己が好むところを運び移す。⁽⁵⁾ 汝の心のあるところには汝の寶もあるべし。⁽⁶⁾ その故に私達が寶を持たんとぞむところに私達の心もあらん事を。

(3) マルコ一・三五

(4) マルコ九・二以下其他

(5) ヨハネ三・八

(6) *Ubi autem erit cor tuum, illic erit thesaurus tuus.* 引

照したと思われ、マタイ六・二一は *Ubi enim est thesaurus tuus, ibi est et cor tuum.* (Vulg.) であらう。

第三章

祝福された人達よ、今や牢獄は基督者には不快なものになるだろうか。私達は奥義の御言 (*sacramenti verba*) に應答したときには既に生ける神の軍隊へと召し出されたのである。如何なる兵士でも快適な気分で戰場に赴くのではない。又自分の部屋から戰場に出かけるのではなく、戦備を整えてある狭い天幕からで、そこにはあらゆる種類の生硬さ、不便や不快な事がある。しかも彼等は既に平時から、武装して行軍したり練兵場を走つたり溝を掘つたり圓陣をつくつたりする事によつて、苦勞や不便をして戰場で苦しむ事をおぼえている。心身が日蔭から白晝へ、炎天から極寒へ、下着から甲冑へ、沈黙から叫聲へ、静寂から喧騒へという程の變化にもおどろかないためにあらゆるものに苦勞の汗がかけられているのである。それ故に祝福された人達よ、君達はそれが如何に苦しいものであらうとも靈魂と身體の能力

テルツリアヌス「殉教者達に」

の訓練のためと看做せ。君達は勇敢な競技につき進まうとしている。そこでは判定者は生ける神、監督者は聖靈、冠は永遠の冠、天使的存在となる報い、天の國籍、永遠の光榮である。その故に君達に御靈を以て油そそぎたまうた私達の主キリストイエス (Epistates vester Christus Jesus, qui vos Spiritu nuxit,……) は君達の中にある能力が鼓舞されるために君達をこの陣營の中に携え入れ競技の日を前にして快い状態から切りはなしてこれまでよりもつときびしい取扱いをのぞんでいたまうた。競技者は、勿論實力をつくるのに専念するために一層きびしい訓練に向う。彼等は放逸さ、豊かな食物、快い飲物を斷念する。彼等は自らを抑え責め苦しめる。練習によつて苦勞をしたらそれだけ益々彼等は勝さに利に望みをかけるのである。使徒は云う「彼らは朽つる冠を得んためなれど我らは永遠の冠を得んとするものである」と。私達にとつて牢獄は最後の審判の座 (stadium tribunalis) に於て私達があらゆる不快な事によつてよく訓練されたことを示すための練習場のように解されよう。というのは堅固な事は徳をきずきあげるが柔弱な事はそれを破壊してしまふ。

(7) コリント前九・二五

第四章

私達は主の教えから肉體は弱くても靈魂はそなわつている (promptus) という事を知つて⁽³⁾いる。主は肉體が弱いとみとめています以上私達は誘惑に陥らぬようにしよう。しかし又その故に主は靈魂はそなわつて⁽³⁾いるとあらかじめ云いたまうた。それは一方が他方に服従するべき事を示さんがため、即ち肉體が靈魂に、より弱いものがより強いものに服従する事、前者が後者から能力そのものを得るためであつた。靈魂は肉體とその共通の救いについて相談することにならう。そこでは最早牢獄の煩いではなく(靈魂の) たたかいが考えられている。おそらく肉體に無慈悲な劊や高くあげら

れた十字架や強暴な野獸やすべての焚刑やあらゆる刑史の巧みをこらした拷問をおそれるであろう。しかし靈魂は自らに對し又肉體に對して反對の態勢をとる、即ち上述の事柄がどんなに苦しくとも多くの靈魂によつて耐えられ、否むしる榮譽と光榮のためには熱心に求められるのである。そうするのは單に男のみならず女も亦―祝福された婦人達よ (Benedicite)、貴女達も亦その性に應じてなすであらう。

自らの靈魂に従つて處刑にまでも向つて行つた人々を一つ一つ數えるだけでも長くなる。婦人についてあげれば、ルクレティヤという人がある。彼女は姦淫の罪に問われて自らの純潔の光榮にしたがうために親戚の面前で自らに刃を下した。ムティウスという人は自分の右手を焼き切つて聖壇にささげた、それは自分のこの行爲が噂に上るためであつた。哲學者達はあまりそんな事をしない。しかしヘラクレイトスのような人は自分を牛の糞尿で汚してから焼き殺してしまつた。又エムペドクレスはアテネの山の火の中にとびこんだ。そしてペレグリムスは最近火刑場に突き進んで行つた。婦人達も亦火をもつた。即ちデイドという人は最愛の夫の死後結婚を強いられないためにそうした。同様に又ハズバルの妻はカルタゴが焼かれたとき自分の夫がスキピオの歎願者となるのをみないために自分の子供達と共に市の大火の中にとびこんで行つた。ロマの將軍レグルスはカルタゴ人に捕えられたとき自分一人のために多くのカルタゴ人捕虜が返還されるよりはむしろ敵方にとどまることを望み、棺のようなものに詰められ外からいたるところに釘で刺し通され磔刑の苦しみにちつと耐えた。婦人で野獸達に自らすすんで向つていつたものがいた、クレオパトラが敵の手に捕われぬために自らを付したのは牡牛や牡熊よりもおそろしい蛇即ち蝮蛇であつた。死の怖れは拷問の苦しみに比べれば大したものではなかつた。したがつてアテネ人のある娼婦も死刑執行人の手に自らを付した、彼女はあゝ陰謀に参加しそのために専制君主によつて拷問にかけられたが共謀者を打明けず最後にはこれ以上拷問をつづけてもそれによつて彼女がやつた事が何一つ知られぬように自分の舌をかみ切つてその君主の顔にむけてそれを吐き出した。

又今日ラケゲエモンの町で盛大な儀式になつてゐるもの、デアアマステイゴシス (Gumwattiwos) つまり鞭打ちが一般に知られてゐる。その儀式には身分の高い青年達が祭壇の前で鞭で打たれるのである、彼等の両親や近親達が傍らに立ちその激勵によつて彼等は耐えしのぶのである。若しそこで肉體よりも靈魂が傷つけば、むしろその印によつて名譽と光榮があるとされてゐる。かくして、若し肉體と靈魂の勇氣にもとずく地上の光榮がかかるものであり、そのために彼等が劔も火も磔刑も野獸も拷問も人間の賞讃の特典に於てもともしないとなれば、私は敢えて云うのであるが、天の光榮と神の報いを得るためになされるかの刑罰はとるにたらないものになる。若し水晶が高價ならば決してや眞珠はどんなものだろう。他のものが偽りに對してそれだけのことをしているからには眞理のためには誰がよろこんでかようなことがなせぬ筈があろうか？

(8) マタイ二六・四一

第五章

今ここでは榮光の所以についてのべることを省かう。あらゆる種の殘酷さと苛酷さを持つ争いや人の前にみせようとする虚榮心、更には心の一種の病疾といつたものがこれを踏みにつつてゐた。如何に多くの者達が好戰慾によつて武器をとつてゐるだろうか。それによつて實際彼等は闘技場へと下つて行き、傷や疵をうけて自らが素晴らしいものようにみた。又彼等は火の中へ自らを投じて一定の間火の燃えている着物をきていた。又他のものは特に用た皮鞭の下に打たれてあえぐ肩を以て往來した。祝福された人達よ、主はこのような事柄を故なしにこの世に許したまうたのではなく、私達に向つて今は勵ましそしてかの日には自らと結び合はんがためである。若し私達が救いとなる眞理のために苦しむ事をおそれるならば、他の者達が滅びとなる虚榮のためにこれを欲しているのはどうしたことか。

第六章

私達は欲望から來ているかような忍苦の例を省かう。そして人間の現状そのものに考慮を拂おう。それは私達がたえず來るものでありながら思いがけなくも生ずるようなものからでも學ぶためである。如何に屢々火災で人間が焼け死んだことだろう。如何に屢々猛獸が森の中で或は町の眞中で檻からのがれたときに人間を喰ひ殺したことであろう。如何に多くの者が強盜によつてその刃で殺されたり又敵によつて始めは拷問により次にはあらゆる虐待に合わされ磔刑にして殺されたと貌であろう。神の御名のためには苦しむ事をためらつていたその苦しみを誰もが人間のために苦しむようになつた。この事については今日の時代が實に私達には證據になるだろう、多くのそしてあらゆる種類の人々がその血統、地位、風と、年齢の故に人間のため不慮の死をとげた。この者に叛けばそれによつて、或はこの者のために味方すればその敵方によつて。

x

x

x

最後にテルツリアヌスを研究する上での文献をあけておかう。

- Migne, Patrol. Latinae, Tom. 1-2, 1893. (この翻譯もののテキストに依つた)
- Bibliothek der Kirchenväter, Bd. 7, 24, Tertullians (K. A. Keller) 1913.
- The Anti-Nicene Fathers, vol. 3, Tertullian.
K. Adam, Der Kirchenbegriff Tertullians. 1907.
- B. August, Zur Erklärung und Text-Kritik des I Buch Tert. "Adv. Marc." (T. U. 38, 1911).
- F. Böhlinger, Tert. oder Disciplin und Lehre, Apologetik und Polemik, Katholizismus und Montanismus jener Zeit. (Die Kirche Christi, Bd. 3, 1873)
- N. Bonwetsch, Texte zur Geschichte der Montanismus, (Kleine Texte, Nr. 129, 1914).
" Die Schriften Tert's nach der Zeit ihrer Abfassung untersucht. 1878.
- Th. Brandt, Tert's Ethik, 1929.

「テルツリアヌス」殉教者達に」

- G. Fasser, Die Seelenlehre. Tert's, 1893.
- A. Harnack, Griechische Übersetzung der Apologeten Tert's, (T. U. 8, 1892).
K. Holl, Tertullians als Schriftsteller, (Gesam. Aufs. 3, 1897)
- A. Hauck, Tert's Leben und Schriften, 1877.
- J. Klein, Tertullians, Christliches Bewußtsein und sittliche Forderung, 1940.
T. Kohlberg, Verfassung, Kultus und Discipline der christlichen Kirche nach Tert, 1886.
K. Leimbach, Beiträge zur Abendmahlslehre Tert's, 1874.
- J. Morgan, The Importance of Tertullians in the Development of christian Dogma, 1928.
- A. Neander, Antignostikus, Geist des Tert. und Einleitung in diesen Schriften, 1849.
- F. Nöldechen, Tert, gegen die Juden auf Einheit, Echtheit, Entstehung geprüft, (T. U. 12, 1894).
- " " Die Abfassungszeit der Schriften Tert's, (T. U. 5, 1888).
- J. Pelikan, The Eschatology of Tert, (Church History, 1952).
- Rauch, Der Einfluß der stoischen Philosophie auf die Lehrbildung Tert's, 1890.
- R. F. Roberts, The Theology of Tertullians. 1924.
- E. Rolfs, Urkunden aus dem antimonianischen Kampf des Abendlandes. (T. U. 12, 1895).
- S. Schloßmann, Tertullians im Licht der Jurisprudenz, (Z. K. G. 27, 1906).
- G. Schelowsky, Der Apologet Tert. in seinem Verhältnis zu der griech.-röm. Philosophie. 1901.
- H. Schürs; Zur Textgeschichte und Erklärung von Tert's Apol., (T. U. 40, 1914).
- J. Sier, Die Gottes und Logoslehre Tert's, 1899.
- C. Wadstein, Über den Einfluß des Stoicismus auf die älteste christlichen Lehrbildung, (Theol. Studien u. Kritiken, 1880).
- B. B. Warfield, Studies in Tert. and Augustine, 1930.
- M. Winkler, Der Traditionsbegriff des Christentums bis Tert. 1897.
- K. H. Wirth, Der Verdienbegriff bei Tert, 1892.

(○印は同社社名を著者が入手し得るものとす)